



Title	ジェンダー化される「第三世界の子ども」像：バン グラデシュにおけるアシッドバイオレンス根絶運動の 事例から
Author(s)	近藤, 凜太朗
Citation	大阪大学教育学年報. 2022, 27, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジェンダー化される「第三世界の子ども」像 —バングラデシュにおける アシッドバイオレンス根絶運動の事例から—

近 藤 凜太朗

要旨

本論は、アシッドバイオレンスのサバイバー支援を担うバングラデシュの女性NGOの広報活動を事例として、「第三世界の子ども」像を構築する視覚的なジェンダー表象の意味作用を明らかにするものである。女性NGOがウェブ上に公開する写真集を素材とした分析の結果、以下の知見が見出された。第一に、本写真集は、他の開発・人道支援組織の広報物と同じく、無垢な「子ども」像や「母子」像を配置することでオーディエンスの共感を喚起していた。第二に、写真集に登場する「第三世界の男の子」像は、暴力被害による心理的葛藤や社会関係上の困難とは切り離され、女性サバイバーに期待される安価な生産労働やケア労働を免除されていた。「第三世界の子ども」像は一枚岩ではなく、ジェンダーによって差異化されていたのである。しかし第三に、そのような「第三世界の男の子」像に表出される男性性は、「第一世界」の白人男性との関係においては劣位におかれていた。「第三世界の男の子」像は、グローバルな資本主義の下での男性性のヒエラルキーを崩すことなく、白人男性の覇権を脅かさない位置におかれるのである。

1. 問題設定——「第三世界の子ども」のジェンダー表象

本論は、アシッドバイオレンスのサバイバー支援を担うバングラデシュの女性NGOの広報活動を事例として、「第三世界の子ども」像を構築する視覚的なジェンダー表象の意味作用を明らかにするものである。

E. サイードの『オリエンタリズム』(Said 訳書 1986) 以降、ポストコロニアリズム思想の発展とともに、西欧諸国の経済的・軍事的侵略を正当化する植民地主義的言説群の役割に注目が集まるようになった。そこでは、「文明化の使命」の担い手たる西欧諸国の自己像が、植民地住民のステレオタイプ的表象を通じて存立してきたことが明らかにされてきた(Hall 1992)。Escobar (1995)によれば、第二次大戦後の国際開発・人道支援事業もまた、植民地支配の時代から引き継がれた言説の体系に駆動されている。紛争、貧困、食糧危機といった開発課題は、グローバルな収奪的政治経済構造の産物ではなく、「第三世界」⁽¹⁾に内在する無秩序や後進性の兆候とみなされる。そうした見方の下で「開発 development」という営みは、「第一世界」によるパータナリスティックな介入という性格を強く帯びてきた。

女性解放の思想・実践としてのフェミニズムもまた、ときにこうした言説の作用と接点をもつ。「第三世界」フェミニズム論の嚆矢となったMohanty (1984)は、白人フェミニスト研究者による国際開発の議論において、「第三世界」女性が「受動的で無力な犠牲者」として均質的に表象されていることを明らかにし、それが「近代的で自由な女性」という「第一世界」白人女性の潜在的自己像を支えていると論じた。Mohantyの問いかけは、反レイシズム・反植民地主義の立場からトランスナショナルなフェミニズムの連帶の地平を拓くとともに、ジェンダーの視点にもとづく開発言説研究の先駆けともなった。

こうした流れを受けて、英語圏の国際開発研究では、国連機関・政府系開発機関・財団・国際NGOなど、

開発・人道支援にかかわるアクターが生産し流通させる「第三世界」表象の批判的分析が蓄積されてきた (Dogra 2007, Johnson 2011, Lidchi 2015, Wilson 2011など)。ゴミの山を漁るスラムの少年、大きな目でこちらを見つめる痩せこけた乳児、早婚の慣習によって教育機会を阻まれる少女……。寄付の呼びかけを主な目的として制作されるこれら無数の広告や出版物は、人種やジェンダーにかかわるステレオタイプを取り込みつつ、定型的な「第三世界」イメージを創り出す。それらは、単に資金獲得手段となるだけではない。「第一世界」と「第三世界」のあいだに想像上の関係が確立され、維持されていく主要なフィールドを構成しているのである (Smith & Yanacopulos 2004)。

一連の表象分析研究のなかでは、開発・人道支援組織が「子ども」の視覚的モチーフを多用する傾向にあることは、ほぼ共通見解となっている。例えば、Lamers (2005) は、ベルギーの国際NGOの広告を35年間 (1966~2001年) にわたって跡づけ、人物像のなかで子どもの姿がもっとも頻繁に使われていたと指摘している。「第三世界」の人々を受動的で従順な子ども像によって代表させることは、「第一世界」主導のプロジェクトに対する合意を調達するのに役立つのである。90年代頃からは、憐れで無力な子ども像に加えて、明るい笑顔の子ども像が徐々に台頭するが、貧困や人道危機の根本原因であるグローバルな搾取構造が不可視化されている状況に大きな変化はない (Hesford 2011, Zarzycka 2016など)。

2000年代半ば頃になると、「女の子への投資 investment in girls」を貧困撲滅の鍵とみなす発想が国際開発政策のなかで主流化していく（その代表例が、ナイキ財団の「ガール・エフェクト」キャンペーンである）。これに伴って、「第三世界」の少女たちを魅力的な投資先として称揚する新しい言説群に研究上の関心が集まるようになる。Calkin (2015), Koffman & Gill (2013), MacDonald (2016) らが論ずるように、これらの言説群は「ジェンダー平等」や「女性のエンパワーメント」といった耳触りの良いスローガンを掲げるものの、実際には少女たち自身の権利獲得というより、その家族や地域共同体の福祉のために彼女たちの献身性を活用する論理を内包している。既存のジェンダー関係を（変革するのではなく）維持しながら資源として利用し、主流の開発モデルに女性を動員しているというのである。

本論はこれらの批判的研究群とスタンスを共有しており、その知見に多くを負いながら具体的な事例をもとに議論を深めようとするものである。とはいって、「第三世界の子ども」像に着目してきた従来の研究では、「第三世界の女の子」が理想的投資先として価値付与される過程には強い関心が寄せられる一方、「第三世界の男の子」がいかにジェンダー化された主体として表象されるのか、という論点は十分に深められていないように思われる。たしかに従来の研究でも、「第三世界の男性」像には間接的に言及がある。そこでは、彼らが酒・タバコ・ギャンブルといった浪費行動と結びつけてイメージされ、女性とは対照的な、「援助に値しない堕落した存在」として構築されていると指摘されている (Dogra 2011, Koffman & Gill 2013, MacDonald 2016など)。しかし、それはあくまで「成人男性」に限定されたイメージであって、もとより共感と憐みの対象である「子ども」がモチーフであれば、同じ「男性」ジェンダーといえども質的に異なる意味作用を帯びるのではないか。本論では、「第三世界の女の子」とも「第三世界の成人男性」とも異なる独特の位置を与えられた「第三世界の男の子」のイメージに特に着目することで、「第三世界の子ども」表象の分析に新たな論点を加えたい。こうした作業は、植民地主義的開発言説の体系を、ジェンダーの視点から、より多面的かつ精緻に描き出すことにもつながるはずである。

2. 分析の対象——アシッドバイオレンス根絶運動と写真集*Unstoppable*

アシッドバイオレンス (acid violence) とは、硫酸などの酸性物質を顔や身体に浴びせることで、著しい

身体損傷を与える暴力をさす。主に90年代以降、バングラデシュ、インド、パキスタンなど南アジア諸国に加え、カンボジア、イランなどで数多く報告してきた。被害者は女性69%・男性31%で女性に多く（ASF 2013, p.12），加害者の大多数は男性だという（Kalantry & Kestenbaum 2011）。発生の経緯は、土地・財産相続・金銭関係のトラブルや恋愛・結婚にかかわるトラブルなど多岐にわたる。サバイバーと加害者の関係は、実家の成員（13%）、夫または夫の実家の成員（13%）、近隣住民（36%）、関係不明（37%）となっており、家族や知人からの被害が多数を占める（ASF 2013, p.11）。したがって、この暴力は「酸を浴びせる」瞬間だけを切り取った一回的な行為としては理解できない。それに先立ってDVやハラスメントが長期間続くケースがほとんどであり、ジェンダーにもとづく暴力一般と連続しているのは明らかである。

アシッドバイオレンスの原因は、ともすると、加害者個人の特殊な攻撃的人格、もしくは貧困層・農村部・ムスリムの「男尊女卑的な遅れた文化」へと回収されがちである。だが、この暴力の件数が急増した90年代は、輸出志向型縫製産業の興隆に伴う女性の大量雇用、マイクロクレジットの浸透など、経済のグローバル化の波がバングラデシュ社会を急速に変容させた時期にあたる。それゆえこの暴力は、工業化や開発の進展に伴って流布される「女性解放」のレトリックと、それに対する「不安」の高まりという動態のなかで生じていると捉えるべきである（Chowdhury 2015）。実際、縫製工場で賃金を得る女性に対する失業男性の不満や、マイクロクレジットでの融資受入交渉の失敗が暴力を招いているという報告もある（Anwary 2003, Khan 2005）。この暴力が男性権力の行使なのは明白だが、グローバルな資本主義と国際開発の進展による家父長制の再編という歴史的文脈を見逃すことはできない。

本論で焦点をあてるのは、バングラデシュのダッカに拠点をおくAcid Survivors Foundation（以下、ASF）というNGOである。ASFは1999年の設立以来、この暴力のサバイバーに対し、ヤケド外科手術、カウンセリング、職業訓練など、包括的支援を提供する先駆的組織として、件数の大幅な減少⁽²⁾に貢献してきた。

とはいっても、ASFがおかれた文脈には留意が必要である。ASFは、UNICEFやCIDA（カナダ国際開発庁）など国際的なドナー機関の出資によって設立された組織であり、バングラデシュに拠点をおくからといって「ローカル」な草の根組織とみることはできない。ASFをフィールドとするエスノグラフィックな研究（Chowdhury 2011）によれば、ドナー資金に依存する制度化された組織形態ゆえ、成果が可視化されやすい活動領域（外科手術や職業訓練など）に注力せざるを得ず、性差別を告発する変革的志向性は弱まりがちである。広報活動の一環として制作されるポスターや発行物についても、外部資金調達の必要性から、ジェンダー・ステレオタイプを強化するメッセージを用いる傾向が指摘されている（Rhaman 2010, 近藤 2017）。国際的な資金援助ネットワークに組み込まれた現地組織として、「第一世界」ドナーの関心を逸脱しないような広報活動を求められているといえる。

分析対象とする素材は、ASFがウェブ上に公開する⁽³⁾写真集*Unstoppable: The Courage within*（2014）である。この写真集は、90年代からサバイバーの撮影を続ける写真家S. Kironの作品群をASFの協力のもとで配列したもので、91枚の写真とその内容を説明する英語の文章情報から構成される。12人のサバイバーのストーリーを描く組写真（4～7枚のシーケンス）をメインにすえつつ、その合間に縫うようにして、ASFの活動紹介写真、国際機関から表彰を受けた際の記念写真などが配置されている。「力強さ、回復力、意志の強靭さによって、彼女たちは…（中略）…止まることを知らない（unstoppable）存在になっていきます」（*Unstoppable*, p.126）とASF事務局長が述べる通り、被害を乗り越えていく力強いサバイバーの姿を伝えることをコンセプトとしている。ニュースレターや年次報告書といった他の発行物と比べても、サバイバーの経験をこれほどの厚みで描く媒体はない。子どものサバイバーも数多く登場し、幼い男の子を取り上げた組写真も掲載されていることから、本論の問題意識にも適う素材といえる。なお、本写真集を対象とした表

象分析の成果はすでに2本の拙稿（近藤2018, 2020）にて公表しているが、本論ではそこで論じられなかつた「子ども」像の意味作用に焦点をあてたい。

3. 「第三世界の子ども」像の表象分析

「子ども」像の分析に先立って、本写真集に登場するサバイバーの年齢構成を簡単に把握しておきたい。表1にみるように、ASFが1999年から2013年にかけて実際に把握していたサバイバーの年齢分布（被害当時）は、0～12歳が375人（10.7%）、13～25歳が1323人（37.7%）、26～45歳が1505人（42.9%）、46歳以上が307人（8.7%）であった。これに対し、文字情報等をもとに、本写真集に登場するサバイバーの年齢を同様の区分で集計したのが表2である。0～12歳が22人（15.0%）、13～25歳が28人（19.0%）、26～45歳と46歳以上はいずれも該当者がなかつた。年齢を正確に把握できるケースが少ないと年齢不明者の割合が高く出てしまうが、26歳以上であることが確実に判明するサバイバーが1人もいないうことは特筆されてよい。「見た目」の印象レベルでみても、年齢不明のサバイバーの大半は明らかに20代以下にみえ、40代以上の中高年層と判断できる人はほほいない。実際の年齢分布では約半数が26歳以上であり、46歳以上の人も0～12歳と大差ない比率で存在することを考えると、本写真集に登場するサバイバーはかなり若年層に偏っており、そのぶん「子ども」像のウェイトが大きくなっているといえる。

(1) 「か弱い無垢な子ども」像

では、「子ども」像の意味作用は、具体的な個々の写真のなかではどのように表れるのか（なお、以下に掲載する写真の出典はすべて*Unstoppable*であり、以下の文中では写真集冒頭からの通し番号を1枚目、2枚目……のように**太字**で表記する）。

図1に示す6枚目の写真は、当時5歳のBablyというサバイバーが、暴力撲滅を呼びかける集会でバナーをもつ様子である。写真横には、次のような文章がある。「Bablyが証明しているのは、どれだけ年齢が若くとも、アシッドバイオレンスに抗議することの重要性を人に伝えることができるということだ。ここにいる彼女の背丈は、自分が握る『Stop Acid Violence, Restore Law and Order』と書かれたバナーをわずかに上回るにすぎない」。本写真集には、このように暴力反対運動に参画するサバイバーの姿がいくつも登場する。この写真もまた、サバイバーの「内なる勇気 courage within」を描く写真集全体のテーマを反映しているといえる。

しかしそれと同時に、視覚表象としてのBablyの写真には、それにとどまらない別種の意味作用がまとわ

表1 サバイバーの年齢分布（1999～2013年累計）

年齢区分	女性		男性		男女計	
	実数(人)	%	実数(人)	%	実数(人)	%
0～12歳	206	8.6	169	15.3	375	10.7
13～25歳	1073	44.6	250	22.7	1323	37.7
26～45歳	980	40.7	525	47.6	1505	42.9
46歳～	149	6.2	158	14.3	307	8.7
合計	2408	100.0	1102	100.0	3510	100.0

ASF (2013, p.12) をもとに筆者作成

表2 *Unstoppable*に登場するサバイバーの年齢分布（延べ人数）

年齢区分	女性		男性		男女計	
	実数(人)	%	実数(人)	%	実数(人)	%
0～12歳	14	10.1	8	100.0	22	15.0
13～25歳	28	20.1	0	0	28	19.1
26～45歳	0	0.0	0	0	0	0
46歳～	0	0.0	0	0	0	0
年齢不明	97	69.8	0	0	97	66.0
合計	139	100.0	8	100.0	147	100.0

りについているように思われる。バナーを肩の位置まで懸命に引き上げてもなお地面に接触させている姿は、単に彼女が身体的に未熟であるという事実のみならず、「脆弱さ vulnerability」や「無垢さ innocence」といった象徴的意味を喚起していると考えられるのだ。また、周囲を取り巻く大人たちを画面から除外し、Bablyひとりを画面中に収める構図は、彼女を保護し教え導く「第三世界」の成人の不在を暗示する。「か弱い無垢な第三世界の子ども」を孤立させる画面構成によって、そこにまなざしを注ぐ「第一世界」のオーディエンスが、保護・救援を施す主体として立ち上げられる。

国際NGOが発信する子ども像を分析したManzo (2008, p.641)によれば、政治色の強い運動への賛同を訴える媒体であっても、「無垢な子ども」像を押し出す限り、そこには社会的正義へのコミットメントのみならず、パトナリスティックな救済を求めるメッセージが紛れ込む。子どもの顔写真は、「変革のための闘いに支持を (Support me in my struggle for change)」という呼びかけだけでなく、「貧しい私を助けて (Rescue me! I'm poor)」という定型的なメッセージをも忍び込ませてしまうというのだ。

Bablyの写真も、同様の二重性を孕んでいると考えられる。本写真集は、単に若年層のサバイバーを量的に多く取り上げるだけではなく、象徴的な意味での「子ども」的なる存在としてサバイバー像を呈示しているのだ。ここでは、暴力と闘う女性主体像の陰に隠れて、抑圧された「第三世界女性」を救援するという植民地主義的筋書き (Abu-Lughod 訳書 2018) もまた、ひとつの表象空間に同居することになるのである。

(2) 神聖なる「母子」像

これとは別のパターンの「子ども」像として、女性サバイバーの隣にその子どもをあえて配置するケースにも触れておく必要がある。

14枚目の写真（図2）は、Majedaというサバイバーが、視力を失った状態で生後3日の息子とともに横たわる様子を示している。「Majedaには息子の姿が見えないが、息子が自分を見ているのが彼女には分かる。…（中略）…悲劇に追い打ちをかけるように、「目の見えない女に家族の面倒は見られない」と言い残して、夫はすぐさま再婚してしまった [=別の女性と結婚してしまった——引用者註]」。暴力がもたらす深刻な身体的・社会的影響を如実に伝える1枚である。

溶解・変形した眼の周囲の皮膚、そして両腕の鮮明なヤケド跡を目の当たりにして、オーディエンスは激しく動搖し立ちすくむだ



図1 6枚目（8頁）2005年3月撮影



図2 14枚目（19頁）1998年8月撮影

ろう。だが、この写真には同時に、そのような衝撃を緩和する仕掛けも施されている。「母」と「子」の親密性ないし一体性を印象づける構図と、それを補強するキャプションによって、「第一世界」のオーディエンスにも馴染み深い視覚表現が成立しているからである。

Lutz & Collins (1993, p.168) が指摘するように、西欧キリスト教世界の伝統において、母子像はあらゆる文脈を超越した普遍的な愛の象徴とされ、「第三世界」表象でもきわめて頻繁に用いられる。ここでも同様に、「無垢さ」の象徴である幼い子どもをフレーム内に配置することで、女性サバイバーの純粋な愛情が前面化し、子どもに慈愛を注ぐ「母」としての神聖性が付与される。精神的な絆で結ばれた母子のイメージは、「第一世界」のオーディエンスが援助を施すにふさわしい理想的な「犠牲者」像を構成する。また、夫の再婚の事実が記述されることで、母子を扶養すべき（とされる）「第三世界の男性」の不在、すなわち母子の社会的孤立が示唆されていることも、脆弱さを印象づけるうえで多大な役割を果たしている⁽⁴⁾。

また、Dogra (2011, p.335) は、開発・人道支援組織の広告に使われる母子像について、貧困や食糧危機といった「政治」的問題が「私的」な親密空間に存するかのように描かれることによって、問題の政治的・歴史的条件を捨象する作用をもつと論じている。この写真においても、母子を襲う「悲劇」として暴力を描くことで、暴力の背景にあるグローバルな開発やそれに伴う家父長制の再編といった歴史的過程を後景化しているといえよう。「子ども」像は、女性サバイバーへの共感を呼び込む強力な媒介物として機能するだけでなく、暴力を脱政治化 (de-politicization) するうえでも重要な位置を占めるのである。

(3) ジェンダー化される「子ども」像

以上のような「子ども」像や「母子」像の働きは、先行研究の指摘通り、開発・人道支援にかかわるファンドレイジングでは広く観察されてきたものである。したがって本写真集もまた、「第三世界」の人々を依存的 existence として描く開発言説の一端を担っていることが確認できる。

本論では、ここからさらに1歩踏み込んで、ジェンダー表象としての「第三世界の男の子」像の分析へと向かいたい。本写真集は、12人分の組写真のうち唯一の「男性」サバイバーとして幼い男の子の組写真を掲載している⁽⁵⁾。つまり、現実には幅広い年齢層に分布している男性サバイバー全体を、1人の「子ども」で代表しているのである（表1, 2参照）。これを他の若い女性サバイバーの描かれ方と比較することで、「第三世界の子ども」像がジェンダーによって差異化されていく様相が浮かび上がるだろう。

以下で検討するのは、Durjoyという男の子の組写真である。彼は1歳半のときに被害に遭い、口から頸にかけての皮膚組織が溶解し胸部と癒着したこと、一時は生命の危機に瀕する。だが海外での大規模な手術を経て、元気に動き回れるまでに身体機能を取り戻した。こうした医療面での成功を象徴するケースということもあり、彼の写真はASFのウェブページや年次報告書など、本写真集以外にも様々な場に登場する。いわば組織のアイコン的存在として、つねに親しみを込めて描かれる存在であり、逆説的ではあるが、組写真に掲載された唯一の「男性」サバイバーだからこそ、むしろ強い印象を残している。

冒頭に位置する52枚目（図3）は、2歳時に撮影されたものである。医療機器を装着されながらも、ブレで輪郭がぼやけた両腕の様子から、活発に身体を動かしているのが確認できる。見開き2頁にまたがる大判写真である54枚目（組写真の3枚目、図4）は、大きく腕を広げて身を乗り出す姿が印象的であり、外部の世界に自ら飛び出していく冒險心と、それを周囲の大人が歓迎される様子が読みとれる。組写真を締めくくる56枚目（図5）は、オーストラリア大使館で行われたファッション・ショーで撮影されたものである。大胆な腕の動きが目立っていた52枚目や54枚目とは異なって、両手を腰に当ててポーズをとる姿勢は、無邪気な幼児的活発さから脱皮し、落ち着いた少年へと精神的成长を遂げていく過程を表現しているようにみ



図3 52枚目 (69頁) 2006年7月撮影



図4 54枚目 (72頁) 2007年4月撮影

図5 56枚目 (74頁) 2009年8月撮影

える。上り階段が背景となっているのも象徴的で、左足をひとつ上の階段に軽く乗せる仕草からは、不意に背を向けて上方へと歩みを進めそうな雰囲気さえ感じさせる⁽⁶⁾。

このようなストーリー構成は、一見すると、単に「子ども」から「大人」へと向かうジェンダー・ニュートラルな成長過程を描写したにすぎないようにも思える。しかし、Durjoyの組写真は、本写真集に登場する他の若い女性サバイバーの描かれ方とはかなり距離があるのである。

例えば、図6に示す69枚目の写真は、Durjoyと同じく、生まれて間もない頃に被害を受けたShimaというサバイバーを取り上げたものである。文字情報には、「小さなサバイバーがいつも自分の容貌について説明することを強いられ、人と違った存在と感じることを余儀なくされる場合、学校は困難をもたらすものとなる」とある。写真中でShimaに向き合う同級生は微笑みを浮かべているが、その視線を受けるShimaの表情から笑顔は読みとれない。このように、アシッドバイオレンス・サバイバーの個人史において、容貌の「美」をめぐる社会規範とそれによる心理的負担は、しばしば一大テーマとして扱われる。容貌の深刻な損傷は、外見の物理的变化や機能



図6 69枚目 (93頁) 2012年10月撮影

障害にとどまらず、周囲からの眼差しを突如として変質させ、それが自己の内面にも織り込まれて心理的負担を増幅させていく⁽⁷⁾。

それに対しDurjoyのストーリーには、こうした側面での苦悩や葛藤が全く表出されない。すなわち、「男性」サバイバーは、医学的に克服可能な身体機能上の障壁のみに直面するものとされ、社会関係上の困難からは切り離されているのである。他者の眼差しに晒される、つまり「見られる」存在としての苦悩・葛藤とは無縁であり、むしろ外部世界を積極的に開拓していく能動性・主体性が前面に視覚化されている。

この対照性は、暴力被害からの「回復」をめぐるイメージの分岐にも通じている。拙論（2020）では、*Unstoppable*に登場するパワフルな女性サバイバー像の多くが、安価で柔軟な労働力の供給、核家族の下での母親業、地域共同体のウェルビーイングへの尽力など、グローバルな資本主義市場に親和的な主流の開発政策を後押しするものであることを論じた。女性サバイバーの「回復」は、資本主義下の性分業体制に適応して周囲の信頼を獲得し、社会関係上の困難を克服することと同義に位置づけられているのである。

Durjoyの組写真も、こうしたパワフルなサバイバー像の一角を占めているのは確かである。しかし、女性サバイバーが引き受けるような性別役割は、彼には負わされていない。彼の「回復」は、「階段を上る」という抽象的イメージに託されるのみである。つまり、女性サバイバーは安価な労働や他者への献身的ケアを求められるのに対し、Durjoyには個人としての純粋な精神的自立を追求することが許されていることになる。このような意味で、彼の一連の視覚表象は、単なる一般的な意味での「子ども」像ではなく、「男性」という性別カテゴリーに属するジェンダー化された「子ども」像を呈示しているといえる。

（4）「第三世界の子ども」と「帝国」の白人男性

だがここで重要なのは、こうした男性的な「回復」イメージも、あくまで「第三世界の子ども」表象の下位類型としてあり、男性性一般に回収することはできないという点である。したがって以下でみるように、そこに表出された男性性を、「第一世界」の男性たちに付与された権威と同列におくことはできない。

図7に示す70枚目の写真は、クリケットのイングランド代表チームがASF病院の子どもたちを訪問した際の写真である。文字情報には「多くの国内・海外の著名人が、長年にわたってサバイバーとASFに寄り添い、アシッドバイオレンスに反対するASFの闘いに連帯を表明してくれる」とある。

大衆広告のなかの視覚的なジェンダー表現を解読したGoffman（1979）によれば、男女のモデルをひとつの広告写真に同時起用する場合、男性モデルの「相対的サイズ relative size」を女性モデルのそれよりも大きく見せることによって、男性の社会的優

越が視覚化されているという。この写真では、立ち上がって歩く選手たちの目の高さにオーディエンスの視点を固定し、床に座るサバイバーの子どもたちを見下ろすような構図をとることで、白人男性の「相対的サイズ」は最大限に増幅され、逆に子どもたちの姿は限りなく縮小されてみえる。大きく逞しく、かつ世界的に著名なスポーツ選手が体現する白人の男性性を前にして、サバイバーの子どもたちは、性別を問わずあまりにも無力で未熟な存在となる。



図7 70枚目（94頁）2010年2月撮影

クリケットが英国で生まれ、帝国の侵略とともに（現在のバングラデシュを含む）植民地諸国に定着していった歴史的経緯を想起するまでもなく、両者のあいだに視覚的に刻まれた懸隔を、帝国の統治者たる白人男性と植民地民衆のあいだの支配関係の再演と読むのは難しくない。英國の白人男性は、グローバル資本主義が席巻する現代世界において家父長制ヒエラルキーの頂点に位置するにもかかわらず、「連帯を表明」する善良な救世主としてのみ描かれており、その構造的加害者性を隠蔽されている。上述のDurjoyが体現する男性的「回復」のイメージは、この構図の下ではいうまでもなく「子ども」像の側に位置しており、「第一世界」の白人男性の手で救援されるべき客体の位置におかれ。この序列関係は、「男性」サバイバーを「成人」ではなく「子ども」で代表することによって強固なものとなっている。「第三世界の男の子」に付与される男性性は、女性に期待される安価な生産労働やケア労働を免除されるという意味では優位であるが、レイシズムと植民地主義にもとづく男性性のヒエラルキーのなかでは劣位に追いやられるのである。

4.まとめと結論

以上、本論では、写真集*Unstoppable*を素材として、「第三世界の子ども」像のジェンダー分析を行ってきた。見出された知見は以下の通りである。第一に、本写真集は、他の開発・人道支援組織の広告や出版物と同じく、無垢な「子ども」像や神聖な「母子」像を配置することでオーディエンスの共感を喚起していた。第二に、本写真集に登場する「第三世界の男の子」像は、暴力被害による心理的葛藤や社会関係上の困難とは切り離され、女性サバイバーに期待されるケア役割を免除されていた。「第三世界の子ども」像は一枚岩ではなく、ジェンダーによって差異化されていたのである。しかし第三に、そのような「第三世界の男の子」が体現する男性性は、「第一世界」の白人男性との関係においては劣位におかれていた。「第三世界の男の子」像は、グローバルな資本主義の下での男性性の序列を崩すことなく、白人男性の覇権を脅かさない限りで表象空間に位置を占めることを許されるのである。

とはいっても、以上のような批判的分析は、本写真集がもつ資料としての価値を低く見積もるものではない。この暴力について信頼に足る情報を得るのは大変困難なのが実情であり、ネット空間は覗き見趣味を搔き立てるセンセーショナルな顔写真やムスリムへのヘイトスピーチで溢れかえっている。その意味で、サバイバーの経験と現地の運動の歴史を淡々と伝える本写真集が貴重な媒体であるのは疑いようがない。

しかしながら、仮に「第一世界」のオーディエンスが、ここに呈示されたサバイバー像に何らかのかたちで共感できるのだとすれば、それはジェンダー規範と結合した「子ども」観に裏打ちされている可能性がある。あるいはその共感は、レイシズムや植民地主義にもとづく男性性のヒエラルキーを自明視する見方に根をもつているかもしれない。「第一世界」の市民に求められているのは、こうした開発言説を批判的に読み解くりテラシーを獲得するなかで、表象空間の編成を徐々に変革していく努力なのではないだろうか。

註

- (1) 「第三世界」とは一般に、冷戦体制下で資本主義陣営と社会主义陣営のどちらにも属さなかった新興独立国の総称だが、本論では、単なる地理的範囲を指す概念ではなく、植民地解放に向けた国際連帯を目指す政治的プロジェクト（Prashad 訳書 2013）としての歴史的意義をふまえてこの用語を使用する。これに対し、「第三世界」を従属化させる歴史的カテゴリーとして「第一世界」を想定できる。この構図の下での「日本」国家の位置づけは単純ではないが、アジア諸国への植民地支配責任を放棄しつつ経済侵略によって大国化してきた加害の歴史を重視して、本論では「日本」を「第一世界」に属するものとみなす。
- (2) ピーク時の2002年には494件であった件数が、2019年には19件まで減少している。

- [<https://acidsurvivors.org/wp-content/uploads/2021/09/Statistics.pdf>] (2021年11月5日取得)
- (3) [<https://old.acidsurvivors.org/ASF-Publication>] (2021年11月5日取得)
- (4) 直後におかれた15枚目の写真（紙幅の都合により写真掲載は省略）は8年後に撮影されており、8歳になった息子が学校へ出発するまえに彼の衣服を整えるMajedaの姿を取り上げ、8年間尽くしてきた母親としての献身性をアピールする1枚となっている。14枚目と15枚目はともに、女性サバイバーに「母」としての価値を付与する媒介物として「子ども」が挿入される例といえる。
- (5) 組写真以外の部分も含めると、このほかに延べ3人の「男性」サバイバーが登場するが、彼らもすべて0～12歳の年齢区分に属する「子ども」である（表2参照）。
- (6) 56枚目の撮影時期は2009年8月、1枚手前の55枚目は2013年1月であるので、この2枚は撮影順と配置順が入れ替っている。56枚目が組写真の末尾として特にふさわしいと判断されたことが分かる。
- (7) 本写真集もまた、Shimaのほかに、特にMonira、Neela、Moniの組写真において、容貌の損傷を重要なテーマとして描いている。冒頭に置かれたBablyの組写真のみ例外的に、外見的損傷に伴う葛藤がほとんど表出されていないが、これは、視覚的衝撃度の高い写真を写真集冒頭に配置するのを避ける意味合いが大きいと思われる。あるいは別の解釈として、Bablyが舞台上で踊る7枚目（9頁、写真掲載は省略）の写真を、「見られる」存在であることに伴う葛藤を克服した証として読むこともできるかもしれない。

引用文献

- Abu-Lughod, L. 2013. 鳥山純子・嶺崎寛子訳『ムスリム女性に救援は必要か』書肆心水, 2018.
- Anwary, A. 2003. "Acid Violence and Medical Care in Bangladesh: Women's Activism as Carework." *Gender and Society*, Vol.17, No.2, pp.305-313.
- Acid Survivors Foundation. 2013. *Annual Report 2013*. ASF.
- Calkin, S. 2015. "Post-Feminist Spectatorship and the Girl Effect: 'Go Ahead, Really Imagine Her'." *Third World Quarterly*, Vol.36, No.4, pp.654-669.
- Chowdhury, E. H. 2011. *Transnationalism Reversed: Women Organizing against Gendered Violence in Bangladesh*. SUNY Press.
- Chowdhury, E. H. 2015. "Rethinking Patriarchy, Culture and Masculinity: Transnational Narratives of Gender Violence and Human Rights Advocacy." *Journal of International Women's Studies*, Vol.16, No.2, pp.98-114.
（=近藤凜太朗訳「家父長制、文化、男性性を再考する——ジェンダーにもとづく暴力と人権アドボカシーをめぐるトランスナショナルなナラティブ」『大阪大学教育学年報』No.24, 123-139頁, 2019）
- Dogra, N. 2007. "Reading NGOs Visually": Implications of Visual Images for NGO Management." *Journal of International Development*, Vol.19, No.2, pp.161-171.
- Dogra, N. 2011. "The Mixed Metaphor of 'Third World Woman': Gendered Representations by International Development NGOs." *Third World Quarterly*, Vol.32, No.2, pp.333-348.
- Escobar, A. 1995. *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*. Princeton University Press.
- Goffman, E. 1979. *Gender Advertisements*. Harvard University Press.
- Hall, S. 1992. "The West and the Rest: Power and Discourse." in *Formations of Modernity*. eds. by S. Hall & B. Gieben, Polity Press, pp.275-331.
- Hesford, W. 2011. *Spectacular Rhetorics: Human Rights Visions, Recognitions, Feminisms*. Duke University Press.
- Johnson, H. L. 2011. "Click to Donate: Visual Images, Constructing Victims and Imagining the Female Refugee." *Third World Quarterly*, Vol.32, No.6, pp.1015-1037.
- Kalantry, S., & Kestenbaum, G. J. 2011. *Combating Acid Violence in Bangladesh, India and Cambodia*. Cornell Legal Studies Research Paper.
- Khan, F. C. 2005. "Gender Violence and Development Discourse in Bangladesh." *International Social Science Journal*, Vol.57, No.184, pp.219-230.
- Koffman, O., & Gill, R. 2013. "The Revolution will be Led by a 12-year-old Girl": Girl Power and Global Biopolitics." *Feminist Review*, Vol.105, No.1, pp.83-102. (=近藤凜太朗訳「『12歳の女の子による革命』——ガール・エフェクト言説とグローバルな生政治」『大阪大学教育学年報』No.26, 87-106頁, 2021)

- 近藤凜太朗. 2017. 「トランスナショナルなフェミニズム運動と『第三世界』サバイバー表象——バングラデシュにおけるアシッドバイオレンス根絶運動を事例として」『女性学』No.24. 89-110頁.
- 近藤凜太朗. 2018. 「NGOが産出する『ポジティブ』な『第三世界』女性表象——アシッドバイオレンス根絶運動におけるアクティヴィストの視覚表象を事例に」『ソシオロジ』Vol.63, No.2, 3-21頁.
- 近藤凜太朗. 2020. 「グローバル資本主義を支えるジェンダー表象のダイナミクス——女性に対する暴力をめぐる視覚表象と『第三世界』女性NGO」『マス・コミュニケーション研究』No.96, 63-82頁.
- Lamers, M. 2005. "Representing Poverty, Impoverishing Representation ? : A Discursive Analysis of a NGOs Fundraising Posters." Graduate Journal of Social Science, Vol.2, No.1, pp.37-74.
- Lidchi, H. 2015. "Finding the Right Image: British Development NGOs and the Regulation of Imagery." Humanitarian Photography. eds. by H. Fehrenbach, & D. Rodogno, Cambridge University Press, pp.275-296.
- Lutz, C. A. & Collins, J. L. 1993. Reading National Geographic. University of Chicago Press.
- MacDonald, K. 2016. "Calls for Educating Girls in the Third World: Futurity, Girls and the 'Third World Woman'." Gender, Place & Culture, Vol.23, No.1, pp.1-17.
- Manzo, K. 2008. "Imaging Humanitarianism: NGO Identity and the Iconography of Childhood." Antipode, Vol.40, No.4, pp.632-657.
- Mohanty, C. T. 1984. "Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses." Boundary2, Vol.12, No.3/Vol.13, No.1, pp.333-358.
- Prashad, V. 2007. 粟飯原文子訳『褐色の世界史——第三世界とはなにか』水声社, 2013.
- Rhaman, M. 2010. "Body of the Other: Constructing Gender Identity in Anti-acid Violence Campaign Materials in Bangladesh." The Poster, Vol.1, No.1, pp.31-60.
- Said, E. 1978. 今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社, 1986.
- Smith, M., & Yanacopulos, H. 2004. "The Public Faces of Development: An Introduction." Journal of International Development, Vol.16, No.5, pp.657-664.
- Wilson, K. 2011. "Race', Gender and Neoliberalism: Changing Visual Representations in Development." Third World Quarterly, Vol.32, No.2, pp.315-331.
- Zarzycka, M. 2016. "Save the Child: Photographed Faces and Affective Transactions in NGO Child Sponsoring Programs." European Journal of Women's Studies, Vol.23, No.1, pp.28-42.

Gendered Representations of “Children in the Third World” -A Case Study of Anti-Acid Violence Campaign in Bangladesh-

KONDO Rintaro

This paper aims to explore the ways in which gendered visual representations of “children in the Third World” are employed within fundraising and advocacy materials that are produced by international development and humanitarian agencies for publicity in the global North. As a result of an analysis focused on a photobook published on the Internet by a non-governmental organization for Bangladeshi women, which has provided support for survivors of acid violence, the following points were elucidated.

First, this photobook evokes the sympathy toward survivors by deploying visual iconic images of “vulnerable innocent children and their mothers,” like advertisements and publications by other development and humanitarian organizations. Second, the “young boy survivor” visual images that are often used in other materials by this organization are depicted as not experiencing psychological conflicts and social difficulties triggered by acid violence and as not doing cheap productive labor for international capitalist market and caring work for local families and communities, unlike girl survivors who appear in this photobook. This means that he is represented as a masculine subject and that images of children are gender differentiated. Third, the specific masculinity expressed in such images of “boys in the Third World” is presented as inferior to the White masculinity depicted through images of “adult men in the First World.” Under the colonial hierarchy of masculinities in an era of global capitalism, “boys in the Third World” are symbolically located in such a position that would not threaten the hegemony of White men.